

「ゲーセンで出会った生意氣格ゲーメスガキにわからされちゃうー。」
・ボイスドラマ台本

■Track01

「…………おつ？」

「…………やつてるやつてる…………ふふつ」

「ほんにちはっ♪ ねえおじさん、それオンライン対戦やつてるの？」

「ふーん、そうなんだ」

「ほの格ゲー、家庭用も出てるのに、わざわざゲーセンに来てまでネット対戦やるつて、よっぽど物好きじゃない？」

「その熱中っぷりだと、今日はじめて触つたつてわけでもなさそうだし」

「あたし？ あたしはたまたま寄つただけだし」

「…………してもさ、なくんかおじさん弱すぎない？ さつきから全然勝ててない
じゃん」

「ねえ『対空』って知ってる？ 相手のジャンプ攻撃を落とせないと、ヤラレ放題になっちゃうよ？」

「あー、今のコンボミスは痛い。ダメージ取れるところで取つとかないと」

「ん~今の中段は立てなきやダメでしょ。反応悪すぎ~」

「いやあ……そこでその技は確反もらっちゃうって」

「ほらね」

「はい残念、ま、け！」

「ふふっ、悔しそうな顔！ おじさんかわいそ。なけなしの百円、ドブに捨てちやつたようなもんだね♪」

「……あーあ、落ち込んじゃつた！ なっさけない」

「おじさんみたいなザコちゃんはあ、飴でもチュパチュパして、元氣だそ？ はい、飴あげる」

「それにしてもおじさん、へたつぴだね♪ もつとおうちでトレーニングしなよ」

「え、何？ あたしが後ろからうさかつたから負けたつて？」

「うーわダツサ！ 自分が弱いだけのくせに、人のせいにするのヤバすぎ♪ マジありえないんだけど」

「どんだけ格ゲーやつてるの？ え、まじ？ そんな長くやつてる割に弱くない？ もつかい初心者からやりなおしたら？」

「素人よりはそこそこできるっぽいけど、あたしに言わせたらドヘタだね」

「……あ、傷ついた？ ゴメンねえ！ そんなにメンタル弱いだなんてえ、あたし知らなかつた♪」

「あつ、そ、だ！ ねえおじさん、ここで会えたのもなにかの縁だしさあ……」

「あたしとおじさんで、対戦してみない？」

「あー、今笑つたでしょ？ あたしこう見えても結構強いんだよ？」

「いつもおうちにネット対戦やってるし、大会とかにだって出てるもん」

「ネット記事にだつて名前載つたことあるし、SNSとかだと結構有名なんだけどなあ～？」

「あたし、ミトラつていうんだけど、知らない？ ミートーラ！」

「ええ～、マジかあ。結構フォロワー多いのになあ」

「じゃあさ、あたしのランク帯教えてあげよっか？ 聞いたらきっとびっくりするよ」

「はあ？ 聞くまでもないって？ 人のことバカにしすぎじゃない？」

「いいよ、そこまで言うなら勝負する？ あたしが弱いっていうなら、もちろん受け立つよね？」

「言つたね？ じゃあやろっ♪

「あ、言つとくけどお互い手加減なしだからね？ あとになつて、女の子相手だから手加減しちゃつた」とか言うの禁止だよ」

「本気でおいでよ。分からせてあげるからっ」

「ふふ、あたしのことバカにした仕返しに、絶対恥かかせてやるんだから……♪

「じゃあ2先でやろっか。2ラウンド先取制、先に2回勝つたほうが勝者だよー」

「ちょうど隣の筐体が空いてるし、こっちでやうせてもううね」

「あ、そうだ」

「ねえおじさん、どうせなら罰ゲーム決めようよ。そのほうが盛り上がるでしょ？」

「あたしが負けたら、そうだね……おじさんのことバカにしたことは謝るし、あたしに勝てたことといっぱい褒めてあげる♪」

「でも、あたしが勝つたら……ふふつ、あたしのいうこと、いつも聞いてもらおつかな」

「大丈夫大丈夫！ ジュース買ってとか、ぬいぐるみ取ってとかそういうのだからあ」

「……多分ね」

「ふふふん、じゃ、まずは軽く小手調べ♪」

「えい、えい……とう、とう！」

「うわ～おじさんつよい～やばいよ～このままじゃ負けちゃうよ～え～ん」

「あ～体力ゲージもちょっとだ……追い詰められた～……」

「なんんちゃって♪」

「様子見終了！」

「もういいよ、今のでおじさんの実力、ぜえ～んぶわかっちゃったから～」

「言つとくけど、あたし容赦しないからね！」

「おじさんの動き見てるとよく分かるよ、投げキャラ苦手でしょ？ 対策も知らな
そ～だ～！」

「～めんね～、あたしそういうのすぐ分かるんだ♪」

「遠慮なく、ガンガン投げてくから……ねつ！」

「ハイ、1ラウンドもつらい。らつくしょく」

「うーわ、舐めてかかつてたのバレバレ！ 顔真っ赤になっちゃってるうふふ！」

「はあ～、腕が鳴るう。やっぱり格ゲーはオフでやるのが熱いよね♪

「ささ、次々い～！」

「もうお互い様子見は終わっだし、最初から本気でやつてもいいよね？」

「ほらほら、どうした？ 逃げてばっかりじゃこっちのペースだよ？ ん？」

「あたしのジャンプ攻撃、全然対応できていじやん！ 対空下手すぎて笑っちゃうんですケド～！」

「はい投げ抜け～！ そんな子供騙し通用しませ～ん！」

「思考わっかりやすい！ おじさんほんと格ゲー下手あ！ ザコお！」

「コンボだつてズタボロだし、コマミス多すぎ！ 何年格ゲーやつてんの！？」

「うわ、わっかりやすいパナシ～！ 顔真っ赤なの？？」

「あっ、ハイ今の反撃不可です！ おつかれさまでした～！」

「残念～。激弱～。2ラウンド目もよゆーで勝っちゃった♪」

「これだったらわざわざメインキャラなくてもよかつたな～！ サブキャラの練習台にちょーどよさそう」

「や、早くコイン入れてー。どんどんいこ～」

「おっ、さつきと動き違うじゃん。もしかして戦法変えてきた？　いいよいよ、格ゲーマーはそうでなくちゃね！」

「あ、待って待って今の立つてたのに～！　なんで食らっちゃうかな～？」

「む～、こっちの手の内みて、ようやく本氣出したって感じ？　ちょっとはやるじゃん」

「じゃあこっちも戦い方変えてみよ！　これはどうさばく～？」

「お～っと、さつきまでの攻めはどうしたの～？　そんなんじゃやられ放題だよ？」

「あー、らう、形勢逆転～。はい、今度はこっちの番だよ～」

「さつきまでのお返し～！」

「はい勝利～。ちょ一余裕～。またまたあたしが勝っちゃったね！」

「これで最後～！」

「なんとかもう飽きてきちゃったし、さっさと決めちゃおつかな～」

「ほらほら、どしたどした～？　本気出さないとこんなお子様にストレート負けしちゃうよ～？　いいのかな～？」

「はい勝利～！　1ラウンドも取られることがなく終了♪」

「おじさん、びっくりするぐらい弱いんだねつ。やつこ～～。もっと精進しなきや～」

「ねえ悔しい？　ねえ今どんな気持ち？　ねえ、ねえ？」

「うわ、おじさん頑こわい。誘拐されちゃうう～」

「ははは、顔真っ赤にしちやつて面白～い♪」

「や～、あたしが勝つことだし、どんなこと聞いてもらおつかな～」

「ん？ 忘れたの？ 罰ゲームだよ、罰ゲーム。負けたらあたしの～こと、なんでもひとつ聞いてもらうんだからね」

「まさか、あたしにボロボロに負けたくせに、このままノコノコ帰れるなんて思つてないよね？」

「うん、よろしいー！」

「う～～ん、そうだなあ。じゃ～あ～……」

「おじさんに、あたしのおもちゃになつてもらおつかな♪」

「ん？ 聞こえなかつた？ おじさんが、あたしの、おもちゃに、なるのー！」

「いや、ううん、おもちゃが欲しいとかじゃなくてえ……あ～もうめんどくさいー！」

「はいおじさん、田つぶつて！ 絶対あけちゃダメだからね……ー」

「あたしが手ひいたげるから、なにも言わづついてきて」

「いいとこ連れてつてあげるからー！」

「ほ～りはやく、ぐずぐずすんなあ～……！」

■Track01 終了

「はい、田あけていいよー。」

「じゃじゃーん、突然ですが問題です。あなたが今いる□□はどうでしょー？」

「そ、正解。トイレー」

「にひつ、でも男子トイレじゃないよ？」

「ハハハ、女子トイレー！」

「だからおじさん、もし他の誰かに見つかつたら、女子トイレ侵入罪？ みたいな
ので逮捕になつちゃうよ～」

「そ、うなつちやつたら大変だねえ、こわいねえ」

「だから、バレたくなかつたら黙つてなきや、ね♪」

「え、なんでこんなとこに連れてきたかって？」

「そんなの、おじさんを玩具にするために決まつてるじゃん」

「あたしね、こ、うやつて何も知らないおじさんに悪戯するの、大好きなんだあ」

「あたしより一回りも二回りも年上の男の人があ、あたしみたいな小さな女の子に
悪戯されてえ、何も仕返しきづに悶えるの、見ててすつつごい面白いんだよ
ね♪」

「お、つとお、下手に声出さないほうがいいよ。見つかつちゃうからせ」

「もしかしてなんだけど、おじさん、女の子のこと、あくんま慣れてないでしょ。その上、小さな女の子に興奮しちやうロリコンだ」

「見てたらわかるんだあ♪ だつて、さつきからなんかビクビクしてるし、オドオドしてきもいし」

「でも、あたしを見る目だけはどことなくギラギラしちやつてんの♪ 田泳がせるフリして、さりげなく胸とか足とか見てるの……全部バレちゃってるよ」

「子供ちっぽい好きい？ スカートから覗く太ももに触つてみたいい？ んう～？」

「え？ 大人をからかうなつて！？ ふつふふ、ウケるう～！ くそうざ～」

「大人なのに、そんなんにヨワヨワでいいの？」

「無駄に歳くつてる割になつさけない！ 頼りなさすぎて、いじおじ丸出し♪」「つてか、めちゃめちゃ汗かいちやつて……おじさん臭がさつきからキツいんですケド。新陳代謝、どうなつてんの～？」

「はい？ 帰してくれつて～？」

「やうだよ、ここから面白くなるんだから！ 負けた人に人権なんてないんだよ」「いいから、ほら、そこ座つて！ おじさん大きいんだから、立つてたら何もできないじやん！」

「しー、うるさい、だまれ～」

「だくかくら！ つべこべ言わずにあたしのいうこときくの！ おじさん、あたしに負けたんだよ？ あたしに逆らうつもりい？」

「『言つとくけど、あたしムカつかせたら思いつきり声だすからね？　いいの？　スマホだって持つてるし、いつだって通報できちゃうんだからね？』

「そのちっぽけな頭使つて精一杯想像してみてよ♪」

「この状況で他の人に見つかつたらさ、どっちが悪者かなんて一発で分かるじゃん？　お巡りさんに捕まっちゃうの、どっちだろおね♪」

「あたしかなあ？　おじさんかなあ？」

「ふふつ……立場、理解できた？　あたしに逆らおうなんて思つちゃダメだよ。はい、わかつたなら座る！」

「そうそ、それでいいの。最初からちゃんと『言つこと聞いておこうね♪』

「おじさんの人生、今ここでゲームオーバーにしたくないでしょ？」

「それにこれは罰ゲームなんだから、あたしの玩具になつてくれなきや！」

「うん？　やれるもんならやつてみろってえ？」

「そんな事言いながらおじさん、足震えてますけどだいじょうぶう？」

「あつはは、おもしろい！　でも罰ゲームなんだから、そうでなきやね！」

「そうだ、じゃあこうしよっか」

「あたしの罰ゲームに声も出さずにちゃんと耐えることができたら、仕返しにあたしたこと、好きにしていいよ♪」

「何をするのもおじさん次第。今まで生意気言つたことも、ぜーんぶ謝つてあげる♪」

「その代わりい、声出しちゃつたら……そこがおじさんのゲームオーバー♪」

「きやー、変態だー！ 変態がトイレに入ってきたー！ めちゃくちゃにされちゃうー！ 助けてーおまわりさーん！」

「あ、もしもしおまわりさんですか？ 助けてください！ 女子トイレに無断侵入してきた脂ギツシユなおじさんに襲われちゃいそうなんですう……って」

「そこでおじさんは、ハイ終了。」パトカーに乗せられさようなら～

「ねっ、面白そうでしょ？」
燃えてきちゃった

あたしつつてこいついう勝負」とが大好きだから、余計に

「え〜? こんなお子様に負けるわけないって〜? ほんとかなあ〜?」

「あ、先に言っておくね。あたしがおじさんに触れるのはいいけど、おじさんがあたしに触るのは絶対禁止ーー！」

「だって、それじゃあ罰ゲームになんないし、おじさんの力で抵抗されたら、女のあたしが勝てるはずないじゃん？ それってフェアじゃないよね？」

「まあ、おじさんが本当にロリコンじゃないっていうなら、あたしに触るわけないし、ね？」

「あたしに触つても負け、あたしの責めに屈服しても負け♪ こんな不利な状況で、果たしておじさんは生き残れるかな～？」

「さ、そろそろ準備はいい？」

「じゃあラウンド1、スタート！」

「さあ、どこから攻めちゃおうかな？」

「おじさん、耳弱そう。遊んじゃおーっと♪」

「どっちの耳が弱いのかなあ？」
右かな？
左かな？
右かな～？」

「ふう～……っ」

「ふふ、びくびくしててるの、かわい」

「ねえ知つてる？　この間、授業で習つたんだけど……耳つてさあ、神経がいっぱい通つてるんだってさ」

「だから、刺激されたらすごく敏感に、気持ちよく感じちゃうんだって！」
つま
りい、お耳も立派な性感帯ってわけ♪

「どう?
ゾクゾクする?
ねえゾクゾクするう?」

「あれあれ？ おじさん、鼻息荒くなつてきてるよお？ これから女の子に虐められると思つて、興奮してきちゃつた？」

「あはは、面白い。や～こ」

「こんなこと、誰にもされたことないでしょ？……って、いるわけないか」

「彼女がいたら、こんな時間からボツチでゲーセンなんてこないもんね♪」

「ふう……」

「あはは、やせ我慢してるう？」
表情でバレバレなんんですけど。【ざあこ】

「でも、まだ降参は許さないからね」

「ふう……」

「くすぐったいでしょう。でも声を出しちゃダメだよ～？」

「……もうもう、やればできるじやん。その調子、その調子」

「やあ～て、いつまで我慢できるかなあ？」

「ふう～……ふう～……」

「ふふ～、楽し～♪」

「おじさん、すひ～い悔しそう。そうだよねえ、悔しいよねえ、びくびくしちゃうよねえ♪」

「いいよ、才能あるよお。調教される才能ってやつ？ くす～」

「ふう～……」

「クスツ、男の人でも、こんな情けない声出すんだね♪ どう？ 悔しい？ 自分より年下のちっちゃい女の子にこおんなに虐められて」

「ふう、ふう～……」

「あれ、もしかして喜んでる～？ 喜んじゃつたら罰ゲームになんないじや～ん」

「～んなちっちゃい子に耳フーフーされて喜んじゃうようじや、人生お終いだよ？」

「ふう～……ふう～……」

「どう？ 隆参？ もつとしてあげよっか～？」

「ねえどしたの～？ やつから声上ぢつてんじやん～。きもーい」

「遠慮しないでいいんだよ？」
あたしは優しいからさあ、こういうのが好きなん
だつたらもつとしてあげる」

「ははっ、おじさん、すっかりおとなしくなつちやつたねえ？」

「格ゲーでバトルする前の威勢はどこいつちやつたのカナ～？」

「あんなに強気な態度とつてたのに、今はこおんなに好きなようにされて、恥ずかしくないの〜？」

「ま、女子トイレに座らされて女の子に好き放題されてる時点で、恥ずかしいか

い？」
——こんなみつともないオトナ、相手してあげるのあたしくらいしかいないんじやな

「うー……うー……」

「やせ我慢は体に毒だよお♪ ほら、もつと声出してえ」

「声出したらオシマイだけどね♪」

「ふうー…………ふうーつ…………」

「じゃーあ、今度は左の耳いってみよつか……！」

———
う——
———
う——
———

「くすっ……おじさん、びくびくうつて肩が震えちゃつてるよお？ そんなに気持
らいいの〜？」

「うくん？ 首は横に振つてるけど、体は正直みたいだよお？」

「おじさんの苦しむ声、もっと聞かせてえ？」

「ふう、ふうー……」

「ははつ……おもしろい その顔超ウケる」

「ふうー……」

「我慢しないでいいんだよ？ もっと気持ちよさそくな顔見せて？」

「大丈夫、写真に撮つたりしないからさあ、おじさんがたしの言つこと聞いてるうちはね！」

「ふうー……ふうー……」

「ふふ、ねえ知つてる？ さつきから、口おつきくなつてきてるんですけど？」

「さわさわ、さわさわ……ねえおじさん、これはなにかな。なにかな？」

「おかしいなあ……さつきまでこんなじやなかつたのに、いつの間にかカチコチになつてるよおー？」

「ねえ、もしかして、小さな女の子にお耳フーフーされて、おちんちん大きくしちやつたのー？」

「え～まじい？ おじさんって超のつぐドヘンタイだね♪ 明らかにロリコンじゃん」

「こんな女子に興奮するとかやばあ、きんもーい☆」

「え？ こんなお子様に興味ないって？」

「うつそだあ……さつきからずつとハアハアしちやつて、こんなところ大きくしながら言つても全然説得力ないよお」

「こんな程度でおつきくしちやうなんて、さすがにぞこすぎい。童貞丸わかりすぎてウケる」

「男つてほんつと、どうしようもない変態ばくつか！」

「ねえ。おじさんつてさ、セックスつて……したことある？」

「ないんじょ？」

「このおちんちんの本当の使い方、知らないんじょ？」

「あ、た、し、が、お、し、え、て、あ、げ、よつ、か？」

「イマドキの女の子つてえ、すつごく進んでるんだよ……？」

「女の子はみくんなエッチなこと知つてるの……エッチなことに興味津々でえ、男の子なんかより全然詳しいの」

「ねえ、あたしの知つてるエッチなこと……もつと教えてほしい？」

「……ふふつ、ばあくか 本氣にしちやつてマジウケる ほんとにしてあげるわけないじやん、なに期待してんのザコお」

「女の子にバカにされてくやしい？ からかわれて泣いちゃう？ 頭おかしいんじやない？ 子供からやりなおしたら？」

「ま、やりなおしたところで、おじさんみたいな人間なんて一生童貞だし、口りにいじられて興奮してる時点で来世でも童貞確定しちやつてるようなもんだからあ」

「今みたいな惨めな人生が妥当かもね」

「あはははっ、おつかしく！　あ、ほらほら、泣いちゃダメだよお、元気出して童貞おじさん……あたしがお耳ふうふうしてあげるからあ」

「ふうー……」

「あはははっ、こんなんで興奮できるんだから、むしろ童貞でラツキーだつたじやん」

「ふうー……」

「痛い？　切ない？　苦しい？」

「パンパンに張り詰めたおちんちん、ズボンから出したくてしようがないよねえ……？」

「でも、だくめ」

「自分で触るの禁止ー。今そこに触つたらあ、あたし大声出しちゃうからね」

「これは罰ゲームなんだから。おじさんが気持ちよくなるようなことさせてあげるわけないじゃん」

「あそこギンギンにして苦しんでるおじさんの今の姿、すっごく情けなくて絵になるよお……」

「写真に撮つて残しちゃおつかあー？　そしたら、いっぱい拡散してあ・げ・る♪」

「え、それだけはやめてって？　ふふ、どうしよつかなあー……」

「おじさん次第だね☆」

「あたしの機嫌損ねたらあ、どうなるかわかんないよおー？」

「あ、そだ。ねえねえ……お耳ふうふうしてばかりだと、冷たくて寒いでしょ？」

「今度はさ、優しくあつたためてあげよっか？」

「はあ～……」

「ね、あたし優しいでしょ？　『』いうことされて、気持ちいい？」

「はあ～……」

「ふふっ、フーフーされるのとは、また違う感じ？」

「お耳、ゾクゾクするう？」

「そんなに苦しそうな顔してえ……気持ちいいの、わかつてんんだからね？」

「はあ～……」

「あつたかあい吐息、気持ちいいねえ……？」

「はあ～……」

「あつたかあい吐息、気持ちいいねえ……？」

「今度はこっち……」

「はあ～……」

「やだウケる　興奮してる顔、まじできもいんだけど♪

「もっとしてあげよっかあ……」

「はあ～……」

「こういうのが好きなんだ……おじさん。あたしの吐息感じる？ あたしの口の中、あつたかそうでしょ？」

「はあ～……」

「ふふっ、そんなに嬉しいのお？ 格ゲーも弱けりや、お耳もザコなんだね～」

「こんなんで気持ちよくなれる人の気が知れないなあ……♪」

「さあてと～、今度は何してあそぼっかな～？」

「あ、そだ、おじさんの体臭チェックしてあげよっか」

「男の人って清潔感ってのが大切だしねえ。ちゃんと毎日気を使ってるか、あたしが直々にチェックしてあげる～」

「まあまあ、そんなにいやそうな顔しないで、さ……」

「まずは、髪の匂い嗅いでみよっか……髪は当然、毎日洗ってるよね？」

「すんっ、すんすんっ……」

「う～わ、ちょっと待って……くっさあ！」

「え、汗かきすぎじゃない？ じやなくても、普段からちゃんと洗ってる人の匂いじゃないなあ……！」

「首元は……？」

「すんすんっ……」

「うえ……やばあ……何この匂い、おじさん体臭まじやばいよ～。くさすぎ」

「くさあ……まじくさあい……汗臭というか、おじさん臭というか……ムワツと漂つてくるの、鼻に刺さるんだけど」

「すんすんつ……」

「はあ……やつばあ、きつつ……！」

「頭クラクラしそう……脳みそおかしなつちやうつて、この匂い」

「ねえおじさんさあ、臭いの自覚ある？ まじえぐいって、これ。犯罪的な匂いだよ。もう一生外出歩いちやダメなやつだ」

「生きてるだけで公害だね♪ 可愛そう」

「すんすんつ……んつ……」

「ううう……ほんとくさあ……」

「すんすんつ……はあ」

「うう……特に首元とかやばくない？ まじくさあい」

「ここから漂う匂いが、おじさんつてよりお爺ちゃんに近いかも」

「お耳の後ろとかあ、3日くらいうつてなさそうな匂い」

「え～？ いまので傷ついた～？」

「そんな泣きそうな顔しないでよ～、男のくせに情けないな～」

「すんすんつ……はあ」

「うえ～……鼻が曲がっちゃいそう♪」

「ん？匂いかがれるの嫌だ？そりや嫌だよね。うんうん、わかるわかる」

「でもね、嫌だって言われたらやりたくなるのが、あたしなんだよね」

「すんすんつ……はあ」

「うつわ……胸から脇にかけて、スッパイ匂いするう……」

「ねえおじさん、毎日ちゃんとお風呂入ってる？ゲームばつかしてないで、ちゃんと身だしなみ整えなく？」

「そんなんだから彼女の一人もできないんだよ 自業自得ってやつ！」

「すんすんつ……はあ」

「ううん……でも、なんだろ。こういうおじさん臭さ、あたし結構嫌いじゃないかも」

「中毒性っていうのかなあ……」

「すん、すんすんつ……はあ」

「ねえ何ニヤニヤしてんの？ ほんとキモいんだけど。鼻の下のびてきてるよ？」

「ちっちゃな女の子に匂い嗅がれてバカにされて興奮するとかあ、まじで変態じやん？」

「すんすん、すんつ……はあ」

「だからさあ……おじさん、なんで罵倒されてどんどん大きくなしてんのお？ ま
じありえないんですけどお」

「特に、ついからものすごく濃い匂いをさせてるし……なに期待しちゃってんの？」

「やんわ……」

「うわっ、キモいって言われただけで、あそこびくびくって動いたあ……変態！」

「デマで童貞でロリコンの変態って、ほんと救いようなやうやでしょ」

「まじクソ雑魚すぎ…… 生きてる価値ないよね」

「で～も。そんなおじさんにもちゃんと価値があるって」と、あたしが教えてあげるー。」

「あたしの玩具としての、だけど♪」

「じゃあ今度はあ、何をして虚めてあげよつかなあ……？」

■Track02 終了

■Track03

「ねえザコおじさん……今度はあ、お耳ペロペロしてあげよつか♪」

「ほおら、嫌がらないの！ 忘れたの？ あたしの機嫌損ねたらどうなるか♪」

「もう大声出しかやおうかな♪？」

「ふふ、それだけは嫌あ？ くすっ、だつたら、きちんと黙つてしましょうね♪」

「やつてと、どちらにしようかな……みくぎっ」

「じゃあ、右からしてあげるねっ」

「は〜〜〜む〜〜ちゅるっ」

「ふふ、びっくりした？」

「気持ちよすぎて大きな声だしちゃわないよう、しつかり我慢して、ね？」

「じゃ、ラウンド2……いつてみよっか♪」

「ペろつ……ペろつ……ペろつ」

「ちゅつ……んちゅ……ペろ、ペろ」

「んふつ……餌を舐めるみたいにい……ペろつ、ペろつ」

「はあ〜……ちゅつ……ちゅぱつ、ペろつ、ペろつ」

「こおんな感じでペロペロされるの、どんな感じい？」

「ペろつ、ペろつ、ペろペろ……」

「まるでおじさんが餌になつちやつたみたいだね」

「こういうのされてえ、さらに大きくなつてえ……気持ちの悪い、ヘ・ン・タ・イ・ド・ス・ケ・ベ・さん♪」

「ん〜、ペろつ……ちゅ……ペろつ、れりゅ……ちゅぶつ」

「れろお……んれりゅ……ぴちや……ちゅぶつ、んちゅ」

「くちゅ、ちゅぱつ……れろつ、ちゅ、ちゅぱつ……んちゅ」

「ふふつ、まあゝた切ない声でてるう……たゞのしゝ」

「おじさんの反応、超面白い……友達に見せてあげたいくらいだよお」

「ええ……ダメエ？ もゝケチだなあ」

「ふふ……まいつか、今はあたしが独り占めしてるもんね♪」

「…………ろつ」

「おじさんは今……あたしだけの、玩具なんだからあ」

「ペろつ……ペろつ……ペろつ……」

「ちゅるつ、ちゅぱ……れりゅ、れろつ……ペろ」

「れろつ……れろつ……ペろつ……れろ、れるつ……ちゅるつ」

「さつきより体、ぴくぴくうつしてきたね……♪ そんなに気持ちいい？」

「ペろつ、ペろペろ……れろお……んはあ……んちゅ、れりゅつ」

「ちゅ、ペろつ、ペろつ……んつ、ペろペろ……するるるつ、れろつ」

「れろお……ちゅつ、ちゅぱ……れりゅ、りゅちゅつ」

「女の子とキスするよりも先にい、お耳ナメナメされちゃつたねえ……可愛そ」

「つてかあ、相変わらずお耳弱いんだねえ 反応良すぎでしょ、ちょーきも。ざあ
～」

「格ゲーだと反応悪いくせに、こっちの反応はいいだなんて……マジウケる」

「こおんなちっちゃん子にお耳舐められて、犬みたいに盛りのついた、どうしようもない変態さん♪」

「さつきからずつとはあはあ言つてんじやん……面白いから、もつとしてあげる♪」

「ぺろつ、ぺろつ、ぺろぺろ……」

「れちゅ……んちゅ……ちゅるるつ……ぺろつ」

「んちゅうう……れりゅ、れろ……ん、はあ……ちゅるつ」

「今度は、左のお耳で耐えてみよっかあ……♪」

「ちゅ、ぺろつ、れりゅ……はあ、ぺろつ」

「ちゅつ……れりゅつ、れろお、れちゅ、んちゅうう」

「お子様耳フェラ……感じちゃう……？ 舌の動き気持ちいい？」

「ぺろつ、れろつ……ちゅ、んちゅ」

「れろお……れりゅ、ちゅふつ、れりゅつ」

「れる、ちゅぱ……ちゅるつ、れろつ」

「んつ……はあ……」

「ねえ、おじさん……想像してみてよ」

「おじさんの、ギンギンに硬くて、おっきくて、そのくせ氣弱そうにピクピク震えてるザコチンポ」

「それを……あたしのこのヌルヌルであつたかうい舌で、ペロペロ舐め回されちゃうの」

「ううやつて、飴を舐めるみたいにい」

「ん……ぺろつ、ちゅ、れりゅ……はあ……れりゅ、れろ、ちゅぷつ」

「んふう……はあ……ちゅ、れろつ、れる」

「どお？ 興奮するでしょお……？」

「ふふつ……あたしのエッチなベロに犯されちゃうおちんちん、可愛そうだよねえ？」

「やだ、ほんとにしてあげるわけないじやん……調子のつちやだあめ♪」

「あたしがクソザワおじさんに優しくするとでも思つた？ 大間違い」

「全部、あたしがやりたいからやるの……あたしがやりたくないことは、やりません」

「でくも……おじさんの態度次第では、考えてあげなくもない……かもしれないかな？」

「あたしにフェラチオしてほしいなら……この程度でイッちやわないようになきや、ね？」

「はい、お耳に集中してえ？」

「ん……ちゅ、ぺろつ、ちゅぷ……はあ……れりゅ、ちゅるる」

「はあ～、ちゅるるるつ……ぢゅるつ、ペロ、れりゅ、れちゅつ」

「感じやすいお耳……もつと気持ちよくしてあげまちゅからねえ」

「ぺろつ……ぺろつ、ぺろ、れろお、れろつ」

「ぺろつ、ぺろつ、ぺろべろ……れりゅつ……ちゅぱ……ちゅぱ」

「ちゅるつ……ちゅぱ、れるれろつ……れりゅうう……ちゅぱ」

「今度はお耳の穴にいれちゃおつ♪」

「れろつ……れぢゅつ……じゅるるつ」

「ぢゅるつ……んれぢゅつ……じゅるる、ちゅぶ、れりゅるるつ」

「ちゅるるつ……じゅる……れちゅつ、んあう……れりゅつ、ぢゅる」

「ちゅぱつ……れろつ……んちゅ、ちゅ、ちゅむつ……んちゅ」

「あー、だうめ、何馴れ馴れしく触ろうとしてんの？ あたしがいつ許した？ 人の言うことが聞けないのかなあ～？」

「触るの禁止つていつたよね？ あたしに触つたら、自分がロリコンのクソ犯罪者だつて認めることになつちやうよ～？」

「二度目はないからね？ 絶対触つたらダメなんだから……わかつた？」

「ふふつ、『わかりました』だつてえ。もう完全にあたしのいいなりじゃん♪ おもしろ～」

「ちゅるるつ……じゅる……れちゅつ」

「ちゅるつ……ちゅぱ……んつ」

「ねえ……どう、気持ちいい？ おちんちんに効くう？ ふふつ、あたし、上手でしょお？」

「なんでこんなに上手いのって……？ そりやあ、おじさん以外の人たちもいっぱい玩具にしたもん♪」

「みんな感じやすいザコ耳で、ちょっと面白かったらしい」

「あれえ、もしかして……妬いちやつてる？ ぷぷつ、だつさー きもー」

「なあ～にい？ あたしに玩具にされてるのは自分だけって思つてた??」

「ばあ～か！ んなわけないじゃん。あたし、このへん拠点にして色々遊んでるんだあ♪」

「おじさんみたいないろんなプレイヤーを叩きのめして、罰ゲームって言つてトレに連れ込んでんの」

「自分が、小さな女子に虐められてるつて気づいたときのあの表情は、忘れられないなあ～」

「つーまーり！ おじさんもあたしにハメられたつてこと！ 最初から最後まで、まんまと踊らされちゃつたつてわけ♪」

「み～んな格ゲー弱いくせにイキつちゃつて、あたしみたいな女子プレイヤーなんて敵じゃないって顔してるけどさあ」

「自分が負けるはずがないって思い込んでるおじさんが、対戦でラウンドが進むごとに少しづつ顔が引きつってくの、もう最っ高におかしくておかしくて」

「だからあたし、そういうおじさんたちの隣の台に座つてプレイするの好きなんだ」

「おじさんの、悔しがる顔が一番良く見えるから♪ にひつ」

「みんなプライドだけ高いけど、こうやつて遊ばれてすぐ心ズタズタにされちゃうんだあ♪ みんな見てて面白いんだよお」

「……ふふつ、だうけうど……安心していいよ。今まで遊んだ中で、一番虐め甲斐のあるお耳をしてるのは、間違いなくおじさんだから♪」

「こおんなに感じやすくて、反応が面白い人、見たことないもん」

「……くすつ、ちょっと嬉しくなつちゃつてんの、マジ超ウケるんですけど」

「勘違いしちゃだめだよ。おじさんが今まで一番、誰よりもクソザコだつていってんの♪」

「わかりましたかあ？ ザあ～こ わかつたら、大人しくしててくだちやいねえ」

「んふう……れろつ……れぢゅつ……じゅるるつ」

「ぢゅるつ……んれぢゅつ……じゅるるつ」

「ぢゅるるつ……じゅる……れぢゅつ」

「女の子甘くてエッチな舌使い、お耳で味わえるなんて中々ない体験だよお……？」

「もつと喜んでもいいんだよお、こういうの好きなんでしょ？ ロリコンのクソザ童貞おじさん♪」

「ちゅるつ……ちゅぱ……んつ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅつ」

「んれろつ……ぢゅるるつ」

「はあ……はあ……」

「おじさんの反応おもしろすぎで、つい夢中になっちゃった♪」

「でも、あたしが本氣出したら、まだまだこんなもんじゃないよお?」

「れろつ……れぢゅつ……じゅるるつ」

「ぺろつ、 ぶちゅ、 れろつ、 れりゅれろ」

「ちゅぱ……んふつ……れろ、 ぢゅるつ」

「んちゅう……んふつ……れろれれおつ……ちゅぱつ」

「そんなにイヤイヤしちゃって……おつかしく♪」

「もう、 どつちがお子様だかわかんないね……?」

「れろつ……れぢゅつ……じゅるる、 ぢゅるつ……ちゅぶ」

「ちゅるつ……ちゅぱ……んつ、 ふう……れろつ」

「んれろつ……ちゅるる……ちゅぱ、 ちゅぱ、 りゅるつ」

「あ……もしかしてえ、 おじさん右より左耳のほうが弱いんだあ?」

「じやあ、 もつといっぱい虐めちやお♪」

「ちゅぱつ……れろつ……んちゅ」

「んれろつ……ちゅるる……つ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅつ」

「あれれえ、おつかしくなう……さつきまで嫌がつてたのに、だんだん嫌がらなくなってきたねえ」

「トトロもビンビンになつてきたし、もしかして完全に喜んじやつてるう？？」

「あ～あ、嬉しがつちゃつたら罰ゲームになんないし、そんなんじや面白くな～い」

「もうやめちゃおつかなあ～～？」

「え、何？　もっとやつてほいって？」どうしようつかなあ……ううん

「逆に」のまま、おじさんずっと放置したままでも面白いかも？ 放置プレイってやつぅ～！ キャハ」

「女の子に耳ナメナメしてほしくて、涙ながらに許しを請う無様なおじさん……絵になるう」

「え？ しようがないなあ……そんなにお耳舐め舐めしてほしいなら、ちゃん
とお願ひしますって言つて？」

「臭くて、キモくて、どうしようもない役立たずのお耳を、優しく舐め舐めしていくさって、言ってみて？」

「…………う、声小さすぎて聞こえな～い。モゴモゴ言つてちや聞こえるわけ無いじやん？」

「もひとちやんと、はつきり囁いて？」

え?
なに?
うん……うん……」

「…………うん、やーだ★」

「ふっはは！ ウケる！ マジでさつきの台詞復唱しちゃつてんの！ 必死すぎだ
し、ちょく悲惨！」

「プライドないんですかあ、おじさんあ～ん」

「もう、しようがないにやあ……！」

「あんまり虐めると、おじさん本気で落ち込んじやいそうだから、このくらいにし
てあげよっかな」

「ん～～～、ちゅ」

「ほら、これでやる気でた？ もっとしてあげよっか……」

「……ちゅ、ちゅつ……ん……ちゅ……ちゅう」

「ちゅつ……ちゅふ……んふ、ちゅう」

「えつちな幼女の甘いキス、堪能しちゃう？」

「いいよ……？ ジャア、キスもしたことなきそなうなおじさん、あたしがキス教
えてあげるね」

「んふ……ちゅるつ、ちゅ……ちゅぱ……んちゅう」

「ん～～、ぺろ、れろつ……れちゅ、ちゅふ、んちゅう」

「え？ あたしがさつきまで食べてたキヤンディの味する……？」

「ふふ、甘酸っぱいキスの味……ってやつだね」

「んちゅ……ちゅ、ぶちゅ……れちゅ」

「ん……おじさん、もしかして今のがファーストキスだった？」

「ふふっ、だあ～って、キスどへただもん！　あうあうしちやつて、初めてなのす
ぐわかるよお」

「残念でした♪　童貞おじさんのファーストキスは、いじわる幼女に奪われちゃい
ました～……ふふっ」

「おじさんの初めて、いっぱいあたしに奪われちゃつてるね……悔しい？　イライ
ラちやう？」

「ほんとにイライラしてるのは、おちんちんのほうかなあ……？」

「ふふっ、からかえればからかうほど面白いなあ、おじさんは……もつと虐めたく
なつちやう」

「ぺろっ、れえろっ……んふう、れろっ」

「おじさんのお顔も、ナメナメしてあげるね……キャンディになつた気分、味わつ
ちやおつか♪」

「ぺろ……ちゅぷ、んふう……れろ、れろお……れろっ」

「ん、もう……無精髭が舌にザラザラして痛いなあ……社会人なら、ちゃんと綺麗
に剃つときなよお」

「れろお、れろお、れろっ、くちゅ……ちゅぷ……ん、ふう」

「れろお、ちゅぷ……くちや、れろっ……」

「ふふっ、おじさんのお顔……よだれにまみれてベタベタだね……」

「何ちょっと嬉しそうな顔しちやつてんの？　虐められて喜ぶとかありえないし」

「でも、そんなに気持ちよかつたんだあ……虐められる才能あるよね、おじさん」

「はあ～むつ、ちゅ……ちゅるつ、れちゅう……くちゅ」

「ぢゅるつ……んれぢゅつ……ぢゅるるつ」

「ちゅるるつ……じゅる……れちゅつ」

「おじさんみたいなクソザコロリコソ童貞おじさんは、頭真っ白にしてなっさけなーい声だけだしてればいいの」

「今のおじさんにできるのは、豚みたいにブヒブヒ鳴いて、お願ひします、単純童貞クソザコチソボから、ぶつ濃い精液、出させてくださいって」

「ちんちん命乞いするだけの簡単なお仕事だ～け♪」

「理解できるかなあ？」

「ま、頼まれても、まだ出させてあげないんだけどね♪」

「ちゅるつ……ちゅぱ……んつ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅつ……」

「こっちの耳もすごく感じるんだ？ ねえ、どっちのお耳虐められるのが好きい？」

「ぢゅるつ……んれぢゅつ……ぢゅるるつ」

「ぺろつ……れろつ……ちゅるつ」

「ぺろつ……れろつ……ちゅるつ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅっ」

「どっちも『気持ちいいよね？ ね？』

「ふふっ、『ヒヒヒ』って気持ちの悪い声だしちやつて、鳴いてばかりじゃわから
ないよ？」

「ねえ、こうやつてえ……」

「ペろつ……ペろつ……ペろつ」

「ちゅるつ、ちゅぱ……れりゅ、れろつ……ペろ」

「耳の周りペロペロされたりい……」

「はむんつ……つちゅ」

「はむう……んむ……んむふう」

「耳たぶをあくまく咥えられたりい……」

「れろつ……れろつ……ペろつ」

「ペろつ、ペろペろ……れぢゅつ」

「穴の周りを舌でくすぐられたりい……」

「ペろつ……れろつ……れりゅりゅりゅ」

「ぢゅるるるるつ……りゅるつ

「穴の中を、ペロで激しくほじられたりい……」

「んちゅ……ちゅうう……ペろつ」

「お耳に優しくキスされたり……」

「トトロ、すっかり『気持ちいい』ですよ、おじさん♪」

「くろっ……ちゅ、んっ……ふはあ……」

「かゅるっ……んれぢゅっ……じゅるる」

「かゅるるっ……じゅる……れちゅ」

「かゅるっ……ちゅぱ……んっ」

「ね、もう正直になっちゃお……。最後まで気持ちよくなりたいんだよね……？」

「わっ！」まで来ちゃつたら、あとに引き返せないもんねえ……でしょ？」

「ふふ、やつと正直になつたね？　えらいえらい♪」

「じょお……じゃあ、おじさんのおちんちんも、あたしが優しく虐めてあげるね♪」

■Track03 終了

■Track04

「はい。じゃあ、おじさんの使いみちのないその役立たずおちんちん、出しへ？」

「んも～うるさいなあ！　いいからほり、どうやらちやんちやんではないで早くう……」

「んつ……うわあ、おちんちんおつきくなつてる……♪ こんなのがズボンの中に入つてたなんて、マジ信じらんない……」

「びくびくつて動いてるう……ふふ、気持ちわるう……いやらしく、ムリ……マジ犯罪級じやん」

「子供にいよいよに罵倒されて、玩具みたいに扱われて、そんなんでおちんぱ大きくしちゃうなんて、キモすぎて吐きそ♪」

「そんなにあたしの攻めが気持ちよかつたんだあ……お耳ペロペロされて、興奮しまくつて、チンポビンビンにして……マジめっちゃウケるう」

「あたしに、虐めてくださいって言つて、情けなく震えてるね♪」

「ほんと……どうしようもない、クソザコのキ・モ・ブ・タ・さんつ……だね♪」

「アハ、こんなちいちゃな女の子に攻められてガチガチに勃起するなんてえ、恥ずかしいとか情けないとか思わないわけえ？」

「ねえおじさん……今の状況、ちゃんとわかってる……？」

「はあうあ……もう全つ然わかつてない顔……脳みそ足りてる？ もしかしてスカスカですかあ？ 頭働いてますかあ？」

「おじさんは今、女子トイレで、小さな女の子に虐められながら、ブザマに勃起させたおちんちんを出してるんだよ？」

「大の大人がなつきなあい、あたしがおじさんの立場だつたら生きていけないなあ……みつともない、超みじめ、きんも」

「ねえ、さつきからずーっと切なそうな顔してるけど、もう限界なの？ 限界なんでしょう？」

「ねえ、あたしにお耳舐められながら、気持ちよくイキたかったんでしょ？ クソザコ中年♪」

「わいてく。もう、しょうがないにやあ……いいよ。ここまで我慢したんだもんね、楽にさせてあげる♪」

「はい。じゃあ早速、自分の手で握ってシコシコ～って、しごいてみよっかあ」

「……え？ しごいてくれるんじゃないの、って？ あたしがあ？」

「ハア？ 頭おかしいんじゃない？ あたしがおじさんの、こ～んな臭くて汚いサイテー無能ちんぽ、触るわけ無いでしょ？ 手が汚れちゃうしい」

「それに、さっきからなんか変な匂いしてるしい もしかして、ちょっと漏らしちやつたりしてるんじゃない？」

「うわあ、ばつちい♪ ありえない！」

「だあかあらあ、自分で自分のをシコシコすればあ？」

「おじさんが不細工で、無様で、醜くて、役立たずで、いやらしくおちんちんを、惨めにしごいてるこ、あたしが全部見ててあげるからさ♪」

「ずっと、自分のおちんちん触りたかったんでしょ？ シコシコ～って、気持ちよくなりたかったんでしょ？」

「だったら、おじさんがいつもやつてるオナニー、今この場で見せて？」

「そ、いつものやつ。おじさんが、毎晩エツチな動画を観たり、エツロ～いマンガを読みながら、必死こいてやつてるオナニーだよ♪」

「それ、見せてって言つてんの……！」

「さつきまで、あたしのエッチな声を聞きながら、エロおく耳を舐められながら、おちんぽブザマに勃起させてたんでしょう？」

「ほら、やつとチャンスが訪れたんだよ？ 格ゲーマーは、一瞬のチャンスをモノにしてかなきやでしょ？」

「ティッシュの中に精液吐き出す以外、なうんの取り柄もない、大きいだけの粗大ごみおちんちん……」

「今この場で、女の子にじょっくりと観察されながらヌキヌキできるチャンスだよお？」

「…………」

「あつは……♪ やば……。ほんとにしこり始めた……」

「うあ、やつばあ……えぐ……！ 息荒げたおじさんのオナニーとかいつ見ても笑うんですけどお……！」

「うわあ、やば、やばあ……♪」

「誰かに見られながらおちんちん扱くの、初めてでしょ？ どう？ 興奮する？」

「さすが、格ゲーやつてるだけあるなあ……ティックレバーの扱いはお手の物つて感じだね」

「ねね、ちょっとそれ、中指と薬指で挟んでき、右に動かしてみてよ……いいからいいから」

「右にぐいぐいって動かしてみて……？」

「いいね♪ じゃ今度は、左に動かして……？」

「はい、前に倒してえ……？」

「後ろに引いてえ……？」

「ふっはははー！ まーじチンポスティックじやん！ あたしの言うとおりにマジメに動かしちゃって面白お、なに操作してんのおー？」

「アハ、怒っちゃつたあ？ そんな顔真っ赤にしないでよお♪」

「はい、じゃあ……おじさんの好きなだけ、思う存分シロシロして？ おじさんのみつともない姿、全部さらけ出ちゃお？」

「あたしが言うとおりに、自分のおちんちん優しくく包み込んでえ、上に、下に、ゆっくり擦るんだよ……」

「あたしのリズムにあわせて……せえの、シロ、シロ、シロ……シロ、シロ、シロ……」

「ほら、シロ、シロ、シロ……シロ、シロ、シロ……」

「あ！ 横手に早くしちゃだーめ！ あたしの言うとおりのリズムでシロるのー！」

「あたしがそんな簡単にイカせてあげるわけないじやん？」

「そんなに早くイッちやつたらあたしが面白くないしい……」

「あたしがいっていうまで、絶対イッつちやダメだからね？ これは命令なんだから」

「じゃあ、いくよお？」

「はい、シロ、シロ、シロ……シロ、シロ、シロ……」

「シロ、シロ、シロ……シロ、シロ、シロ……」

「そ、うそ、ゆ～つくり……ゆ～つくりだよお。おじさん、やればできるじやあん♪」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「あたしの声にあわせてぇ……？」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「ふふふ、おめめギラつかせてえ、必死になつて擦りすぎじやん♪ きんもー」

「先っぽからエツチなおつゆがいっぱい溢れてるう……」

「我慢できなかつたんだねえ～……そんなにシコシコしたかつたんだねえ～！ 待ち遠しかつたんちゅね～♪」

「イキそ、う？ もうイッちやいそ、う？」

「でもまだだーめ、絶対出すの禁止……！ 我慢我慢！ 大人なんだから、それくらいいできるでしょお？」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「そのままのリズムキープして……そ、う、その調子その調子い。脳内お猿さんでも、ちゃんと言つことは聞けるんだねえ」

「くすっ、ぐちゅぐちゅって、いやらしい～音、わざと立ててるでしょ？ やだきもーい」

「ちよ、もっと優しくって言つたでしょ？」

「あんま強く擦つたら、こっちまで汁とんじやうじやん……まじきつたない
くっさ♪」

「やっぱりおじさん、真性のドMなんだね♪ きつつい言葉でなじられて、農まれ
て……悔しいのに、興奮しちゃうタイプ」

「ありえない。やば、きもすぎ♪ 何食つて生きたらそんな変態に育つちやう
の？」

「あはっ、超バカっぽい♪ 今のも興奮材料になっちゃうんだ？ すっごいマヌケ
面になつてるよ……」

「性癖キモすぎ～……おじさんには女子トイレより檻の中がお似合いだよ♪

「ほお、もっと根本の方を握つて、手のひら全体で、牛さんのお乳を絞るように、
ぎゅつぎゅつてシゴいてみて～」

「はい、ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅう～……ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅう～

「ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅう～……ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅう～」

「そのまま、親指と人さし指で、ちんぽのカリ首握つて……さつきより強めにシコ
シコしてみよっか」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「じゃあ、今度は親指でちんぽの入り口を塞いで、くにくにくつて動かしてみて?」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「どう? タマタマにキュンってきた? 精液が無限に製造されてくの、実感できちゃう?」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「もうそ、三つたとおりにちゃんとできる……上手上手♪」

「根本をぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅつ……先っぽ抑えてくに、くに、くに……」

「どう、気持ちいい? あたしの手に握られてるって想像してみて? こんなに気持ちいいことないよね」

「今度は、すこしスピードあげてみよつかあ」

「はい、シコシコシコ……シコシコシコ……シコシコシコ……シコシコシコ……」

「遠慮せずに、あたしの甘くて優しい声を聞きながらあ……思う存分シコっていいんだよ、おじさん♪」

「ふふつ……そそう、上手! ちゃんとあたしが言つたとおりできて偉いね♪
立派立派あ!」

「じゃ、今度は……空いてる手でタマタマを優しく撫でてみよつか♪」

「ヒツチな精液が、今にも溢れちゃいそうなくらいいっぱい溜まつた、おじさん
のた・ま・た・ま♪」

「あ、今ちょっと出ちやいそうになつたでしょ……正直に言わないとダメだよ?
嘘ついたつてすぐわかるんだから」

「ふふ、まだだめ♪ 射精はまだ禁止で～す♪」

「はい、おちんちん握った手はシコシコしながら、もう片方でタマタマなでなでし
てみて?」

「なで、なで、なで……なで、なで、なで……」

「なで、なで、なで……なで、なで、なで……」

「ねえ～、おじさんの声、うわざつてるよ……気持ちよすぎてたまらないって顔
しちやつてるよお……?」

「くふつ、ざ～～」……この程度でイキそうと、どんだけヨワヨワなちんぽしてん
の? 男のプライドある?」

「まだわたしは射精許可出してないからねえ～……?」

「はい、お手々は休まず、動かし続けてね。シコシコシコ……シコシコシコ…
…」

「そ～そ～、わたしの声にあわせて、ビンビンおちんぽ精一杯シゴいて……」

「シコシコシコ……シコシコシコ……」

「シコシコシコ……シコシコシコ……」

「ふふつ、幼女の声に興奮しちやうようなクソザコロリコンおじさんには、お仕置
きしてあげなきや」

「こおろんな声で囁かれるのをオカズにシコれちゃうんだから、やつすいチンポだね♪」

「え、なに？ もつと欲しい？」
せに、要求だけは一人前♪

「もしも～し、聞こえますかあ……言ひなりチンポ、もつとハラハラでもありますか～？」

「ふふつ、ゾクゾクする?」

卷之三

「ちゅつ…………んちゅ…………ぺろ、ぺろ…………」

「女の子に虐められてかわいそうなおじさんのお耳にい、いっぱいキスしてあげるね」

「あ～……ちゅつ……ぺろつ、ぺろつ」

「べろべ、べろべ、べろべろ……れちゅ……んちゅう」

「ん、ぺろつ……くちゅ、ちゅぱ……ぺろつ」

「どお～？ 気持ちいい？ お耳くすぐつたい？」

「ふふっ……じゃあもつと激しく攻めてあげる……その代わり、勝手にイッちゃダメだからね？」

「いいよお、ほらほら、いっぽいシコシコしてえ？」

「ぢゅるつ……んれぢゅつ……ぢゅるるつ」

「んふう……れぢゅつ……ぢゅ、ぢゅるるつ」

「ちゅるるつ……じゅる、れちゅつ……ぢゅるつ」

「ちゅつ……んちゅ……んつ、ふちゅ……ちゅぷつ」

「んふう……気持ちよかつたあ？」

「あはは、おじさん、ブザマな顔してなっさけなあ～い。それでも大人の男なんですかあ？」

「ざーー、ざーーこ。ダメな大人の見本だね♪」

「そんな情けない大人はあ、女の子に軽く罵倒されるだけでイツちやうくらい、あっさり敗北ヨワヨワちんぽにしてあげなきやね」

「ざい」

「ざい」

「やい……」♪

「やい……」！

「興奮する？」

「やい」お」

「ん……やい」

「やい」お」

「やあ……」

「やい」

「やい」お」

「ザコ連呼でガンガンに勃起してゐる、ヘンタイ童貞の人生落伍者♪」

「変態……」

「変態♪」

「へんたーい」

「変態……♪」

「クソザコ」

「キモブタ」

「ハゲカス中年」

「ヨワヨワおじさん」

「ふふ、罵倒が気持ちよくなつてきちゃつた？ あ、新しい性癖の扉、開い
ちゃつたね」

「ちいちゃな女の子にいよいよ弄ばれちゃう、ダメダメな底辺おじさん♪」

「格ゲーでも負けて、罰ゲームでも負けて、負けだらけのブザマな転落人生え」

「あ、そもそも最初から落ちきつてるから、転落じゃないのかあ、キヤハ」

「たつたひとつ取り柄が、このギンギンに大きくなつたちんちんだけだなんて、ほんとしようもない大人……」

「一緒に遊ぶお友達も、愛し合う恋人もいない悲しいおじさんの相手してあげる女の子なんて、あたしくらいしかいないんじやない？」

「ほらほらあ、ヘラヘラしてないでおちんちんに集中集中！」

「シロ、シロ、シロ……シロ、シロ、シロ……」

「んつ……ちゅぱつ……れろつ……んちゅ」

「んれろつ……ちゅるる……つ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅつ」

「ぢゅる、ぢゅる、くぢゅつ、ぢゅるる……んちゅ」

「んふう、れちゅ……くふつ、んちゅ」

「ちゅるるつ……ぢゅるつ……ぢゅるつ、れろつ、れろお」

「ふふつ……ほんと、虐め甲斐があつておもしろい♪ おじさんの反応、ちょっと楽しいもん」

「じゃあお次はあ……金玉なでなでしてお手々の真ん中を、ちんぽの先に押し当てて？」

「優しく包み込むように手を置いたら、手のひらの真ん中で先端をスリスリって刺激してみよつかあ」

「もちろん、シコシコしてる手はそのままだよ？　はい、やってみて？」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「どう？　親指でくにくにってするのとは、また違った快感でしょ？」

「ねえ、だらしない顔もつと見せて？　いっぱいシコシコして？」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「ふあ……ちゅつ……ちゅる、ちゅぱつ」

「ちゅるるつ、ちゅ……れちゅつ、くちゅ、れろお」

「んちゅうう……りゅるるつ、ペろつ、くちや」

「んちゅう、ちゅつ……ペろつ、ペろつ」

「ペろつ、ペろつ、ペろペろ……れちゅ、んちゅう」

「んく、ペろつ……くちゅ、ちゅぱ、じゅる……ペろつ」

「はあ……はあ……」

「んちゅつ……ちゅうう……」

「ほらあ……シコシコする手が止まつてゐよ……？ もつといつぱいシゴいて？」

「今のおじさんにできるのは、情けないおちんちんをシコシコすることだけなんだら、精一杯働いて？」

「おじさんが情けなしくよがつてゐところ、あたしにいつぱい見せて……？」

「もう何も思い残すことがないつてくらい、気持ちよくシコシコしてみてよお……」

⋮

「おじさんの必死な童貞顔、あたしに全部曝けだして？」

「ん……ちゅ、ペろつ、ペろつ、ペろペろ」

「んく、ペろつ……ちゅ……ペろつ」

「んふう……れぢゅつ……ぢゅ、じゅるる」

「ちゅるるつ……じゅる、れちゅつ」

「あは……先っぽから流れ出る我慢汁が……くちゅくちゅつて、いやらしく音立ててゐる」

「今、トイレに他の人が入つてきたら、一発でバレちゃうよ♪

「あ、だからって、手を止めちゃダメだよ？ あたしの言う通りにシコシコしながら、精一杯働いてみよっか」

「じゃあ今度は、少しずつ早くしてみよっか」

「シコ、シコ、シコシコシコ、シコ、シコシコシコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「しゅつ、しゅつ、しゅつ……しゅつ、しゅつ、しゅつ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「しゅつ、しゅつ、しゅつ……しゅつ、しゅつ、しゅつ……」

「ふふ、その調子その調子」

「んれろつ……ちゅるる……」

「れろお、れるお……れりゅ、るちゅ」

「ぢゅるる、ぢゅる、ぢゅる……くちゅつ、んちゅ」

「ほお、う……応援してあげるから、精一杯シゴいてシゴいて?」

「がんばれ、がんばれ、ざー!。ふあいと、ふあいと、ざー!。負けるな、負けるな、ざーこつ♪」

「え……もうダメえ? もうイキそお?」

「えくうつそく。限界くるの早くない? つたくう、だらしないなあ……これだからクソザコ童貞チンポは……」

「あ、そうだ。じゃあさ、あたしが今から数を数えるから、それにあわせて発射してみよっか」

「10から数えて、ゼロになつたらフィニッシュするの。面白そうじゃない?」

「ね、できる? ……ほんとお? じゃあやつてみよー」

「うう……いくよ？」

「10……」

「9……」

「8……」

「7……」

「6……」

「5……」

「4……」

「3……」

「4……」

「5……」

「ろ……え？ 数字が戻つていつて？ なんのこと？ あたし子供だからわ
かんにや～い

「ふふっ、そう簡単にイカせてあげないよ♪ おじさんのクソザコ限界顔、もつ
と楽しませてもらわなきや……！」

「いい？ ゼロになつたらフィニッシュだからね？ ゼロになるまで、ちゃんと我
慢しないとダメだよお……？」

「よく聞いてね～？」

「10……」

「9……」

「8……」

「7……」

「6……」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「ぜ……つたい射精しちゃだーめ！」

「キヤハ、危ない、今でちゃうとこだった？

騙されちゃったね、おじさん！」

「いくよお……？」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「1……」

「にししつ、1の次にゼロが来るのは限らないよ♪ ムカついた？ ねえムカついたあ？」

「もつといつぱいシコシコしちやえ！ ちんちん擦り切れちやうまで、いつぱいシゴいちやえ♪」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「……」

「え？ まだゼロじゃないよお……？ ルールだからね？ ちゃんとわかつてるよねえ、おじさん」

「ふふ、こうやつて焦らされるの、実は好きだつたりする？」

「え？ もう限界？ ほんとのほんとにい……？ お願いしちやうの？ こおんなちいちやい女の子に、大の大人が頭下げちやうの？」

「なっせけなく♪ おじさんプライドも何もかもズタズタだね！ 超おもしろ♪」

「はあ……仕方ないにやあ……」

「じゃあ、今度こそ最後……あたしのカウントダウンにあわせて、思いつきりイツ
てみよ?」

「ふくよ……?」

「10……」

「9……」

「8……」

「7……」

「6……」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「ゼロ♪ はい、ふいに一つしゅ……! イケ、イケ、いっちゃんえ……!」

「んっ……あはっ、すゞい勢い。めっちゃ出てるし……びゅつ、びゅうつ……ふ
ふつ」

「ほりもつと、出せ♪ 出せ♪ 出せ♪ 出せ♪

「んふう……精液、こおんなに溜めてたんだあ……ほんといやらしいおちんちんだ
ね」

「どろつどろの精液♪、これがずっと、おじさんのタマタマのなかで泳いでたんだね♪」

「女の子のいいなりになつて、どこにも到達できずに無駄に発射されちゃつた精液ちゃん、かわいそ♪……おじさんのこと軽蔑しちやうな♪」

「あ、つてかあたしの足にかかるちやつてるんですけどお……まじ汚い……さいつて♪」

「いれ、ちゃんと拭き取つてよね、おじさん」

「くすっ……もう、あたしの言いなりおちんちん……ほんと無様♪ ザーチんぱ♪」

「完全敗北しちやつたね♪ お疲れ様、くわせいおじさん♪」

■Track04 終了

■Track05

「ねえおじさん……もつきあれだけ射精したのに、まだギンギンなのはどういう♪とですかあ？」

「もしかしてまだ出したりなかつたわけえ？」

「今までいろんなザコを玩具にしてきたけど、おじさんほど性欲旺盛な人は初めてだなー♪」

「ふふ、クンザコの変態キモ童貞のくせに遊び甲斐あるじやん？」

「あたし、そういうの嫌いじゃないよ？」

「じゃーあー、今度はどうやって遊んであげよつかなあ？」

「あ、そだ。今度はべろべろ～って、おじさんのおちんぽフェラチオしてあげよつかあ？」

「え、なに？ フエラチオって言葉がでた瞬間、めっちゃ鼻息荒くなつたけど、なになに？」

「まさか……冗談で言つたのに、ほんとにしてほしいんだ……？ うつわー、そんなに興奮しちやうなんて、ドン引き～」

「確かに、さつきは『フェラチオしてほしいならー』とか、『あたしのお口に舐められたら～』とか挑発したけど、ほんとに要求しちやうんだ？」

「あたし、おじさんなんかよりもずっと子供なんだけどな～」

「おこちやまにおちんちん舐めさせようとするなんてえ、冗談抜きで犯罪になつちやうと思ひますよお？」

「……ふふつ、おじさんのその困つた顔、もつとからかいたくなつちやう」

「もお、しようがないなあ。ま、ここまでちゃんとあたしの言うこと忠実に守つて頑張ってきたんだもんね？ そろそろご褒美も欲しくなつちやうか」

「つてか、あたしがおじさん放置したせいで、このまま他の女の子に凸してマジのガチに性犯罪されても困るしね」

「もう何も失うものが今のおじさんは、後先考えずあつさり性犯罪しちやいそうだしなー」

「あ、つてことはあ……今おじさんと2人きりのあたしも危ないかも？」

「……ふふ、なんだ……もじもじしちゃって、ほんと最初の威勢なくなつちやつたね……情けない」

「くつそざあ♪ 底辺以下のよわよわざ～♪」

「しかたがないなあ……可愛そうな童貞クソザコおじさんのお願い、聞いてあげる」

「その代わり、あたしに触るの禁止ってルールは続行。あたしがいって言つまで出しちゃダメなのもそのままね」

「いい？ わかった？ 理解できたかな～？」

「ザコおじさんはあたしの玩具なんだから、持ち主のいうことには忠実に従わないよね……？」

「じゃあ、そのガチガチに張った気持ち悪いおちんぽ、もう一回あたしにじっくり見せてみてよお……」

「今更恥ずかしがることないでしょ？ ほら、手どけて、おちんぽ見せてえ？」

「…………」

「うつわ……でつか……こんなにギチギチに張り詰めて、やばあ……」

「それに、くっさ……♪ 一度精液吐き出して、めちゃめちゃ濃い匂い発してる…
…発酵臭、最悪♪」

「マジでキモい、グロお」

「なあにい、ようやくあたしにフェラチオしてもらえるって期待して、さっきより大きくなっちゃったのぉ？」

「マジウケる」

「やれやれ♪ それじゃあ、あたしが……おじさんのこの生意氣できつたない
発情おちんぽに、いっぱい負け癖つけてあげるね♪」

「はー、きつたないな♪、触りたくないな♪ でも、触ったほうがおじさんの『反
応いっぱい楽しめそุดからな♪』」

「ん……しょ」

「わ！ 手に触れただけでびくんっでした♪ やだなにこれ、きもちわる～！
「大きいな♪、あたしの手に収まりきらないくらい大きい……！ それにすゞく…
…ん、あつついし」

「先っぽからヨダレだらだらお漏らししちゃってえ……どんだけ期待してたの、こ
のド変態♪」

「えー？ うるさいな♪！ あたしがおじさんにおじさん触るのはいいの！ おじさんがあ
たしに触れるのが禁止なの♪」

「ねえおじさんのおちんぽ、今まで見てきたどのザコチンポよりも大きいかも♪
♪」

「でも、立派なのは見た目だけで、その本性はお子様に罵倒されてイツちやうクソ
ザコちんぽなんだよね♪」

「すん、すん……」

「んつ……わくくつさあ……さつき吐き出した精液の匂いが、まだじびりついてる
じやん」

「ちょっと嗅いだだけで、くつせ……」

「すんつ、すんつ……はあくつ」

「ほくんとくさい……ねえ、これがまともな人間の出す匂いですか？ ありえないんですけど」

「ほんなくさーい匂いをおこちやまに嗅がせるなんて、どういう神経してるんですかあー？」

「ちゃんと毎日お風呂に入つて、もっと丹念におちんぽ洗つてください」

「それとも、おじさんみたいなクソザコヨワヨワ人間つて、みくんなこんな匂い出しちゃうんですかあ？」

「公害ですね～この世から消えちゃつてください♪」

「すん、すん……はあー」

「すん……はあー」

「うー、くつさ……くつさ」

「ツンとする酸っぱい匂いの中にい、イカみたいな生臭さがブレンンドされてえ、まるで死んだ魚みたいな匂いするよお……」

「すん、すんつ……はあー。すん、すんつ……はあー」

「ありえない、やば……超くさー……」

「すん、すんつ……はあー。すん、すんつ……はあー」

「ムレムレで超くさい……ほんとやばあ……」

「先っぽの匂いもやばいけど……おちんぽの根元に行くにつれて、どんどん匂いが濃くなつてくじやん……」

「すん、すん……はあゝ。すん、すん……はあゝ」

「う…………ん、くさあ…………くさい、くさすぎい…………ちんちんの匂い…………超こもつてる
……」

「すん、すんつ…………はあゝ。すん、すんつ…………はあゝ」

「タマタマの裏あたりが、一番濃厚な蒸れ臭してるう……」

「おじさんが興奮すればするほど、刺激臭のような匂いがどんどん濃くなつてきて
るんですけどー？」

「ちよつとくさすぎで目がいたくなつてきたかもー！ キヤハ」

「すん、すん…………はあゝ。すん、すん…………はあゝ」

「パンツからボロンしたおちんぽ、クンカクンカされるの、そんなに興奮する？」

「まるでさつきの射精がウソみたいに、もう力チカチに勃起しちゃつてんじやん
嘘だつたんだねー？」

「だつておじさん、もうずっと小さい女の子で勃起しつぱなしだもん♪ おまけに
射精までしちやつたし。完全なる異常者だよ」

「すん、すん…………はあゝ。すん、すん…………はあゝ」

「あは、童貞の匂い超くさーい」

「すん、すん…………はあゝ。すん、すん…………はあゝ」

「ねえおじさん、未成熟な女の子に興奮しちやうだなんて、自分が犯罪者予備軍の
自覚あるう？」

「ないよねえ、だつてさつきからだらしない顔して喜んでるし。クソザコ勃起の完全敗北射精、たくさん楽しんじやつたもんね？」

「あーあ、ゲームですら女の子に勝てないおじさんなんてえ、ずっと一生負け続けの敗北者に決定♪」

「敗北射精、気持ちよかつたねえ？　あの気持ちよさ、また味わいたいよねえ♪？」

「安心して、あたしがたっぷり味あわせてあげるから♪」

「おじさんの心にい、敗北者の印、しつかり付けてあげるからね♪？」

「」の先ずつと忘れられないくらい、負けの味を教えてあげるからね♪」

「すん、すんっ……はあ♪」

「くっさ　鼻がおかしくなつちやうよお……♪」

「これが一生負け続け人間のクソザコ臭つてやつかなあ……超くさあ」

「すん、すん……はあ♪。すん、すん……はあ♪」

「え？　まだ大きな声出してないから負けてないってえ？」

「おじさん、あんだけ思い切り射精しておきながらそれはないって。つまらない見栄張るのはよそく？」

「安心して？　おじさんはどれだけ頑張ったところで、もう一生勝てる人間になんてなれやしないよ」

「まだ勝てると思つてるのは、つまらない大人の意地つ張りな心のせい」

「本当は、心の奥底で理解してるはずだよ。自分が、敗北した最底辺の、出来損ないの負け犬だってこと」

「勝ちたい勝ちたいって口ではなんとでもいえるけどお、体は正直だよねえ」

「女の子にちんちん嗅がれてギチギチに勃起してるのが、その何よりの証拠」

「まだ分かつてなかつたの？」

「おじさんは、あたしにここに連れ込まれた時点で最初から、負けてたの！ 救いようのないクソザコ敗残者」

「アハ、やつとわかつたあ？ 最初から勝負になんて、なつてなかつたの！ ザンコ、キャハ」

「理解したんならあ、その無駄口きゅつと閉じて、負けをじっくりと噛み締めながら、おとなしくあたしの玩具になりさがつてくださーい」

「あつは……あははは、あはははつ！ その悔しそうな顔、面白ーい」

「でもお、おじさんはあ、男のプライドズタズタに引き裂かれて勃起しちゃう、ゴミみたいなド変態なんだよねえー？」

「そんなおじさんのクソザコ敗北チンポはあ、かわいいミトラちゃんが弄んじやいまーす」

「じゃあ、お待ちかねの……フェラチオしてあげよっかあ……、はあ……」

「ふー……ふー……」

「ふふつ、すぐにフェラチオしてもらえるとでも思つたあ？ ほんと単純だよね」

」

「ばくか、ざくざく、あくほ……そんな簡単にしてあげるわけないでしょー？」

「ねえねえ、おちんぽに息吹きかけられてえ、気持ちいい？」

「ふー……ふー……」

「アハ、まるで電流が走ったみたいに、ぴくぴくってしてるう」

「ふー……ふー……」

「ねえおじさん、あたしの息を辿って、頑張ってちんちんつきだしてよお……」

「あたしの唇にたどり着くことができたら、『」褒美にちゅぱちゅぱしてあげるから♪」

「ふー……ふー……」

「鬼さん」ちら♪ 息吹くほうへ♪ 鬼さん」ちら♪ 息吹くほうへ♪」

「ふー……ふー……」

「ほらあ、もうちょっとだよお……もう少し腰突き出して、おちんぽ精一杯前に出してえ……あたしのお口は『』ですよおー？」

「ふー……ふー……」

「ん……あはっ、あたしのベロに、やっとおじさんのおひんぱ届いたね……。よくでひまひたあ……♪ はい、じゃあ……」

「はあ、ふ……んちゅ……」

「♪」ほうびの、おちんぽファーストキス♪

「ん、ちゅ……」

「今、すつざいぴくんつておちんぽはねたねえ？ おちんぽのファーストキス奪われちゃったのが、そんなに嬉しかったあ？」

「もつかいしてみよつかあ」

「んちゅ……ちゅう……」

「あはっ、腰が浮いちやうほど気持ちよかつたんだあ？ きんもーい！ 反応だけは一人前♪」

「ちゅつ……ちゅ……ちゅぱつ」

「んちゅ、ちゅう……ちゅるつ、ちゅう」

「どう？ 生まれて初めておちんぽちゅーされた感想は？ これだけで射精しちゃいそうになつちやう？」

「やっぱ、ちんぽザコすぎ……生まれついてのクソザコじゃん♪ やー、やーこ」

「ちゅ、ちゅぱつ……んちゅう……ちゅるつ」

「我慢しそぎて、先っぽからおじさんの悔し汁どんどん溢れてくるんだけどお……唇に絡みついてきしょい」

「ちゅぱ、んちゅ……くちゅ」

「まだ軽くキスしてるだけだよ？ まさか、本当にもう射精しちやうとかないよねえ？」

「おじさんの顔みてるとお、今にも思いつきリイツちやいそうだけど、まさかほんとにそこまでザコじやないよねえ？」

「悔しいんでしょ？ あたしに勝ちたいんでしょ？ 見返したいんでしょ？ わからせたいんでしょ？」

「だつたらあ、この程度のキスでザーメン汁ブッパとか絶対ありえないよねえ？」

「ほらほらあ、が・ま・ん！ が・ま・ん！」

「フレー、フレー、お・ち・ん・ぱ！」

「フレツ、フレツ、ちんぽ♪ フレツ、フレツ、ちんぽお♪

「ふふつ、ニタついてんの気持ち悪～……」

「それじゃ、ちやんと我慢して、女の子のいじわるおちんぽキス、も～つと楽しんじゃおうねえ？」

「ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「くちゅ、ちゅう……ん、ちゅ……ちゅう、ちゅば、ちゅぶ」

「ん、ちゅう……くちゅ、くちゅ……ちゅぶ、ちゅば」

「唇の感触気持ちいい？ 今までに味わったことのない感覚でしょ？」

「こ～んなかわいい女の子にちゅばちゅばおちんぽキスして貰えるなんて……負け組おちんぽでよかつたでちゅね～♪」

「敗北者のくせに、贅沢なちんぽ……♪ 普通なら絶対ありえないんだよお？ よかつたねえ～♪」

「ちゅう、ちゅ、ちゅ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「そ、うい、え、ば、ち、よ、う、ビ、ス、ト、ツ、ク、の、飴、が、切、れ、ち、や、つ、て、た、ん、だ、っ、け、！」 口寂しいから、おじさんのおちんぽで我慢してあげる♪

「ちゅ、ふ、ん、ちゅ、……、ふ、ちゅ、る、ちゅ、れ、ちゅ、ぢ、ゆ、る、つ、……、ん、ちゅ」

「く、ち、ゅ、う、ち、ゆ、る、う、……、ん、ち、ゅ、く、ち、ゅ、……、ち、ゅ、ふ、ち、ゅ、う」

「ほ、ら、ほ、ら、動、い、ち、や、ダ、メ、だ、よ、お、……、お、じ、さ、ん、の、お、ち、ん、ぽ、は、今、あ、た、し、専、用、の、飴、な、ん、だ、か、ら、～」

「飴、は、ひ、と、り、で、に、動、い、た、り、し、な、い、で、し、ょ、？」

「く、ち、ゅ、ち、ゅ、ふ、ん、ち、ゅ、う、……、ち、ゅ、ふ、ち、ゅ、ふ、ち、ゅ、ふ、つ」

「く、ち、ゅ、ち、ゅ、う、……、ん、ち、ゅ、……、ち、ゅ、う、ち、ゅ、ぱ、ち、ゅ、ふ」

「何、そ、の、顔、な、つ、さ、け、な、～。お、じ、さ、ん、の、半、分、以、上、も、年、下、の、女、の、子、に、お、ち、ん、ぽ、好、き、に、さ、れ、て、嬉、し、が、つ、ち、や、つ、て、る、の、～？」

「や、ば、あ、き、も、お、……」

「ペ、ろ、ペ、ろ、……、ん、ペ、ろ、……、ち、ろ、ち、ろ」

「ペ、ろ、ペ、ろ、……、チ、ロ、……、ち、ゅ、ふ、ペ、ろ、ペ、ろ、……、く、ち、ゅ、ペ、ろ」

「く、ち、ゅ、……、チ、ロ、チ、ロ、……、ペ、ろ、ペ、ろ」

「あれ、あれ、～、さ、つ、き、よ、り、も、ず、一、つ、と、体、が、ピ、ク、ピ、ク、は、ね、て、る、よ、～？」

「ザ、コ、チ、ン、ポ、ち、や、ん、あ、た、し、に、舐、め、ら、れ、て、早、く、精、液、出、し、た、い、～、つ、て、悔、し、涙、ド、ロ、ド、口、溢、れ、させ、ち、や、つ、て、る、ね、え、♪」

「ブ、ザ、マ、な、姿、が、お、似、合、い、だ、よ、お、じ、さ、ん、♪」

「べろ、べろ……くちゅ、ちゅふ……べろ、べろ」

「ちゅふ……べろ、くちゅ……べろ、べろお」

「ねえ、ギンギンにそそりたつたこのクソザコおちんぽ、あたしのお口に咥えてほしいんじょ?」

「わざとらしく、じゅるじゅる音を立てて……エロおくしゃぶってほしいんだ?」

「ペロペロされて、ふうふうされて、ちゅぱちゅぱされて……もつはちきれそうにパンパン……きんむ」

「おじさんの我慢も、もう限界に近づいてきたみたいだしい……そろそろ本気おしゃぶりしてあげよつか」

「はあ～～～むつ」

「おじさんのおちんぽ、大きくて咥えづらいなあ……♪ 頸が外れちゃいそう」

「んむつ……じゅぶつ、じゅるるるつ、じゅぶつ」

「んふつ、どお? きもちいい? あたしのやわらか唇におちんぽシゴかれて、最高?」

「んじゅるつ、ちゅう、ちゅぶ……くちゅ、んつ」

「亀頭を舌で包み込んでえ、竿を唇でシゴいてえ、そのままおちんぽ全体をナメナメ～♪」

「べろ、れるお……んれろ、くちゅ……ちゅるつ……れろお、れろお」

「もつと気持ちいい声出して……もつといっぱい喘いでよお、おじさん」

「ブザマで気持ちの悪い顔して、精一杯頑張つて作った精液、無駄撃ちしちゃえ」

「あむつ、んむ……ちゅふ、ぢゅふ、じゅふ……くちゅ……ちゅぱ」

「え～？ 休ませてあげるわけないじゃん。全部搾り取るまで終わらないよお～？」

「おじさんの負け犬チンポ、お手々も使ってシゴいてあげる♪ こうすると、もつとヤバいでしょ？」

「弱点だらけのクソザコチンポ～♪」

「くちゅ、ぴちゃ……ふちゅ、んちゅうう……ん、はあ」

「あんなに馬鹿にしてたお子ちゃまの、ナメナメお口セックス気持ちいい？ 女の子優位で、ずっとチンポいじめられるの最高でしょ？」

「もう、おじさんのおちんぽ……大人の女人じや勃たなくなつちゃつたかもねえ～」

「おこちやま女の子にしか勃起しない、変態でダメダメなクソザコ犯罪者チンポのできあがり～♪」

「んふ、むちゅ……くちゅ、じゅる、じゅるるつ……んちゅぶ」

「そろそろ、いっぱいみたいだねえ？ こままお口の中で出ちゃうの？ ねえ出ちゃうのお？」

「あたしに舐められて、勝手に腰動いてんじやん～超生意氣～」

「もしかしてえ、あたしのお口をオナホか何かと勘違いしてますか～？」

「くちゅ、くちゅ、むちゅ……んちゅ、ぢゅるつ」

「ちゅふ、ちゅふ、ちゅふ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「もう、しょうがないなあ……いいよお、おじさんの精液、全部あたしが搾り取つてあげるからね」

か「女の子のお口に包まれて、敗北宣言しながらズザマに絶頂射精……しちやおつ

ぐちゅ、
むちゅ
……
んちゅ、
ちゅ、
ちゅる、
ぐちゅ

「女の子のお口の中にい、
無駄撃ち射精して種付けしちゃお♪」

「んふう、出る？ 出ちやうんでしょ？ いいよ、思いつきり出しちやえ♪」

「さうぢやん さうぢやん」

「ん?」
「んん??」
「んふうんん?、んんん?」

「…………んむう…………んふう…………んくう…………はあああ…………あふう…………」

「あれえ、おじさん……もしかして、もうタマタマの中身全部出しきつちゃつたの?¹

「え……うそお、きもく。早すぎ〜！ 勢い良かったの最初だけじゃん、さすがにひくわ〜……」

「でもま、今まで遊んだ玩具の中では、まあまあ持ったほうだと思うよ〜？ よかつたね♪」

「おじさん、結局あたしに完全敗北しちやつたね。残念でした！」

「あーあ〜、さ〜て、おじさんにも飽きちゃつたし、そろそろ別の玩具探しに行こうつかな♪」

「つてことで、対ありでした〜！ おじさんの運がよければ、またどこかのゲームで会えるかもね」

「次に会うときまでには、もうちょっと強くなつておきなよ。格ゲーも、おちんぽも♪」

「リベンジいつでも受けて立つてあげるから！ それじゃ、またね。ばいばい…」

■Track05 終了